

原始根, 標数の性質
(等差数列上の Euler の $\frac{\varphi(td)}{\varphi(d)}$ の応用)
Some Properties
of
Primitive Roots and Indices
(Application of Euler's Totient Function
 $\frac{\varphi(td)}{\varphi(d)}$ on Arithmetical Progressions)

中嶋真澄

Masumi NAKAJIMA

Department of Economics

International University of Kagoshima

Kagoshima 891-0197, JAPAN

e-mail: nakajima@eco.iuk.ac.jp

概要

Abstract

We prove here some properties of primitive roots and indices in Elementary Number Theory by applying Euler's totient function $\frac{\varphi(td)}{\varphi(d)}$ on arithmetical progressions [3].

Key words ; primitive roots, indices.

Mathematics Subject Classification ; 11A07.

以下アルファベット文字は自然数か整数を表わす。

Fermat の(小) 定理 :

p を素数として, $(a, p) = 1$ の場合, $a^{p-1} \equiv 1 \pmod{p}$ が成り立つ.

から

p を素数として, $(a, p) = 1$ の場合,
 $a^x \equiv 1 \pmod{p}$
 となる $x \in \mathbf{N}$ が存在する.

ことが分かる。これより

定義 1

p を素数として, $(a, p) = 1$ の場合,
 $a^e \equiv 1 \pmod{p}$
 となる最小の $e \in \mathbf{N}$ を $\text{mod } p$ に関する a の位数 (ベキ数) と云う.

定義 2

p を素数として, $(a, p) = 1$ の場合, a の位数 (ベキ数) が $p-1$ となる a を素数 p の原始根 **primitive root** と云う.

注 $\text{mod } p$ (p は素数) に関する相異なる原始根は全部で $\varphi(p-1)$ 個存在する。

注 a^n , ($n \geq 2$) は $p \equiv 1 \pmod{n}$ なる素数 p の原始根には成り得ない。
 これより, (完全) 平方数は原始根に成り得ない。

定義 3

p を素数として, $(a, p) = 1$ の場合, g を素数 p の原始根とするととき,
 $g^x \equiv a \pmod{p}$ となる x を原始根 g を底とする a の標数 **index** と云って $\text{Ind}_g a$ 又は $\text{Ind } a$ と表わす。

注 任意の a に対して $\text{Ind}_g a$ は存在する。

補題 1

$\text{mod } p$ に関して a の位数 (ベキ数) が $e \iff e = \frac{p-1}{(\text{Ind } a, p-1)}$

証明省略.

補題 2

$$\sum_{x < n; (x, n) = d} x = \frac{n}{2} \varphi\left(\frac{n}{d}\right).$$

証明 $(x, n) = d \iff (n - x, n) = d$ と

$$\sum_{x < n; (x, n) = d} 1 = \varphi\left(\frac{n}{d}\right)$$

に注意すると

$$2 \sum_{x < n; (x, n) = d} x = \sum_{x < n; (x, n) = d} \{x + (n - x)\} = n \sum_{x < n; (x, n) = d} 1 = n \varphi\left(\frac{n}{d}\right)$$

を得る。□

定理 1

p が素数として，位数 e に関する自然数 a の $\text{Ind } a$ の総和は

$$\sum_{a; (\text{Ind } a, p-1) = (p-1)/e} \text{Ind } a = \frac{(p-1)\varphi(e)}{2}.$$

証明

補題 1 より $(\text{Ind } a, p-1) = (p-1)/e$ 。故に補題 2 を使って

$$\sum_{a; (\text{Ind } a, p-1) = (p-1)/e} \text{Ind } a = \sum_{x; (x, p-1) = (p-1)/e} x = \frac{(p-1)\varphi(e)}{2}. \quad \square$$

補題 3

g が素数 $p \equiv 1 \pmod{4}$ の原始根ならば， $-g \equiv p - g \pmod{p}$
も原始根である。

証明省略.

補題 4

$p \equiv 1 \pmod{4}$ の最小原始根を g_0 ，最大原始根を G_0 とすると，
 $g_0 \leq \frac{p-1}{2} - \frac{\varphi(p-1)}{2} + 1$ ， $G_0 \geq \frac{p-1}{2} + \frac{\varphi(p-1)}{2}$.

証明

p の原始根は全部で $\varphi(p-1)$ 個あり、補題 4 から 1 から $p-1$ の間に $\frac{p-1}{2}$ に
 関して対称に分布する事から従う。□

定理 2

素数 p の相異なる原始根を $g_1, g_2, \dots, g_{\varphi(p-1)}$ とすると、
 任意の自然数 $a \neq 1$ に対して

$$\sum_{k=1}^{\varphi(p-1)} \text{Ind}_{g_k} a = \frac{(p-1)\varphi(p-1)}{2}$$

 が成り立つ。

証明 定理 2 の証明として後に行く。

定理 3

素数 p の相異なる原始根を $g_1, g_2, \dots, g_{\varphi(p-1)}$ とすると ($p \neq 2, 3$),
 $g_1 g_2 \cdots g_{\varphi(p-1)} \equiv 1 \pmod{p}$

証明

g を p の原始根の一つとすると
 $g_1 g_2 \cdots g_{\varphi(p-1)} \equiv g^{\text{Ind}(g_1 g_2 \cdots g_{\varphi(p-1)})} \pmod{p} \cdots (*)$
 が成り立つ。

一方,

$$\begin{aligned} \text{Ind}(g_1 g_2 \cdots g_{\varphi(p-1)}) &\equiv \text{Ind}g_1 + \text{Ind}g_2 + \cdots + \text{Ind}g_{\varphi(p-1)} \pmod{p-1} \\ &= \frac{(p-1)\varphi(p-1)}{2} \quad (g_k \text{ の位数は } p-1 \text{ として定理 1 を使った。}) \\ &\equiv 0 \pmod{p-1} \quad (\varphi(p-1) \text{ は偶数である事を使った。}) \end{aligned}$$

従って, $n_0 \in \mathbf{N}$ が存在して

$$(*) \equiv g^{n_0(p-1)} \equiv 1 \pmod{p}. \quad \square$$

定理 2 の証明

次の事を証明すれば十分である。

補題 5

(i) 自然数 a が位数 e に属すと、 $\text{Ind}_{g_k} a$ は g_k が p の全原始根を動くとともに、位数 e に属す自然数 a の標数 Ind 全ての値を取る事が出来る。即ち、位数 e に属す自然数を、(a も含めて) $a_1, a_2, \dots, a_{\varphi(e)}$ とすると、原始根 g を固定した集合 $S = \{\text{Ind}_g a_1, \text{Ind}_g a_2, \dots, \text{Ind}_g a_{\varphi(e)}\}$ と a を固定した集合 $S' = \{\text{Ind}_{g_1} a, \text{Ind}_{g_2} a, \dots, \text{Ind}_{g_{\varphi(p-1)}} a_{\varphi(e)}\}$ に対して $S = S'$ が成立する。但し、 $\{1, 3, 2, 1, 1, 3\} = \{1, 2, 3\}$ 等とする。

(ii) $\text{Ind}_{g_k} a$ ($k = 1, 2, \dots, \varphi(p-1)$) が取る値は $\text{Ind}_g a_1, \text{Ind}_g a_2, \dots, \text{Ind}_g a_{\varphi(e)}$ だが、それらは同数個現れる。(勿論、(i) と同様に $a_1, a_2, \dots, a_{\varphi(e)}$ は位数 e に属し、 a は $a_1, a_2, \dots, a_{\varphi(e)}$ のどれかである。) 即ち、 $\text{Ind}_{g_k} a = \text{Ind}_g a_i$ ($i = 1, 2, \dots, \varphi(e)$) なるが g_k は、 $\frac{\varphi(p-1)}{\varphi(e)}$ 個ある。但し、 $a_i \not\equiv a \pmod{p}$ である。

例：定理 2 と補題 5 $p = 13$ とすると、原始根は 2, 6, 7, 11 の $4 = \varphi(12)$ 個である。

g_k	a	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
2		0	1	4	2	9	5	11	3	8	10	7	6
6		0	5	8	10	9	1	7	3	4	2	11	6
7		0	11	8	10	3	7	1	9	4	2	5	6
11		0	7	4	2	3	11	5	9	8	10	1	6
$\sum_{k=1}^4 \text{Ind}_{g_k} a$		0	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24	24
a の位数 e	/	12	3	6	4	12	12	4	3	6	12	2	

証明 $a = 3$ を例に取ると、定理 2 の式は表 table を縦に加えて和 24 を出すものであるが、補題 5 を使えば、 $a = 3$ と同じ位数を持つ $a = 9$ を考えて横に加え、その重複度 (補題 5, (ii)) を適用すれば、同様に和 24 を出す事が出来る。補題 5 を証明すれば補題 2 より、

$$\sum_{k=1}^{\varphi(p-1)} \text{Ind}_{g_k} a = \frac{\varphi(p-1)}{\varphi(e)} \sum_{(\text{Ind} a, p-1) = \frac{p-1}{e}} \text{Ind} a = \frac{\varphi(p-1) p - 1}{\varphi(e) 2} \varphi(e)$$

となり、定理 2 が証明される。従って補題 5 が証明されれば良い。□

補題 5 \iff 次の補題 6 は明らかである。

補題 6

方程式

$$\text{Ind}_{g_k} a = \text{Ind}_g a_i \quad (g_k \not\equiv g \pmod{p}, a \not\equiv a_i \pmod{p})$$

の解 g_k は存在し、その個数は $\frac{\varphi(p-1)}{\varphi(e)}$ 個である。但し、 e は a の位数である。

証明 標数の良く知られた性質により,

$$\begin{aligned} \text{Ind}_g a &\equiv \text{Ind}_g a_i \text{Ind}_g a_k \pmod{p-1}, \\ (\text{Ind}_g a, p-1) &= (\text{Ind}_g a_i, p-1) = \frac{p-1}{e} = d, \\ (\text{Ind}_g g_k, p-1) &= 1 \end{aligned}$$

であるから,

$$\text{Ind}_g a =: B, \quad \text{Ind}_g a_i =: A, \quad \text{Ind}_g g_k =: x, \quad p-1 =: m$$

と置けば補題 6 は次の補題 7 に帰着する。□

補題 7

$$Ax \equiv B \pmod{m}, \quad (A, m) = (B, m) = d \text{ の } (x, m) = 1 \text{ なる解 } x$$

の個数は

$$\frac{\varphi(m)}{\frac{\varphi(m)}{d}}$$

個である。証明 $A = da, B = db, m = dm_0$ とすると $(a, m_0) = (b, m_0) = 1$ で $ax \equiv b \pmod{m_0}$ の解 x は唯 1 つしかなく, それを x_0 とすると $(x_0, m_0) = 1$ である。故に $Ax \equiv B \pmod{m}$ の解は $x_0, x_0 + m_0, x_0 + 2m_0, \dots, x_0 + (d-1)m_0$ である。 $(x_0, m_0) = 1$ より $(x_0 + km_0, m_0) = 1$ である。故に $(x, m) = 1$ なる解を調べる事に帰着する。よって次の定理 4 が証明されれば、定理 2 の証明は完了する。□

定理 4 [3]

$$\#\{k \mid (a + kd, t) = 1, (k = 1, 2, \dots, t), (a, d) = 1\} = \frac{\varphi(td)}{\varphi(d)}$$

注 補題 7 の $x_0 \rightarrow a, m_0 \rightarrow d, d \rightarrow t$ と書き換えた。

証明 [3] を参照せよ。□

これで定理 2 の証明は完了した。□

幾つかの予想 Some Conjectures

予想 1 Cojecture 1

任意の素数 $p(\geq 5)q(\geq 2)$ に対して

$$p = \frac{r-1}{\text{Ind}q \cdot r-1}$$

となる素数 r が存在する。但し Ind_q は r に関するものである。

注 これは、奇数の完全数 odd perfect number と関係する。

予想 2 Conjecture 2

任意の素数 p の原始根のうち、半数は $\geq \frac{p-1}{2} + 1$ である。

予想 3 Conjecture 3

g, g' をある素数の二つの原始根とすると

$$\text{Ind}_g g' = \text{Ind}_{g'} g$$

となる。但し、 g' は g のベキでないとする。

参考文献

- [1] 北村泰一 Kitamura, T. 『数論入門 (改訂版)』 *Introduction to Number Theory*, (in Japanese), revised ed., 槇書店 Maki-Shoten, 1986(1965 1st ed.), (v+160)pp..
- [2] Vinogradov, I.M., 三瓶与右衛門, 山中健訳: 『整数論入門』 共立出版, 1959, (iii+202)pp.. *Introduction to Number Theory* (Japanese translation), Kyouritsu-Shuppan, Tokyo.
- [3] 中嶋眞澄 Nakajima, M.: 等差数列上の Euler 関数, Euler's Totient Function $\varphi(n)$ on Arithmetical Progressions, 鹿児島経済論集, 第 62 巻 1 号, 2021 年 7 月, 1-6, *The Kagoshima Journal of Economics*, **62**, July 2021, 1-6.

(received 26 January 2022.)